

# 公文書館研究紀要の発刊について

編集委員長 大塚 英二

愛知県史編さん事業が終了して二年余りとなる。その二六年に亘る調査・研究の成果を紹介していたのが『愛知県史研究』（以下『県史研究』と省略）（全三二四号）であった。それは、資料調査等に参加し、目録整理などにも携わった調査員らが、その目で見て確認し、地域の歴史像について、学術的価値はもちろんのこと、県民にぜひとも知ってほしいと執筆した原稿群で満ちている。こうした誌面がなくなるのは惜しいと、かかわった者たちが思料したのは当たり前である。編さん事業は完結したが、収集資料（主に写真・データ資料など）は龐大に残された。公文書館が引き継ぎ、その活用を任された。直接の後継事業体ではないけれど、任された以上、その資料群の管理・運用だけでなく、編さん事業のまさに成果体としての『県史研究』の継承が求められるのは必然であった。しかも、資料活用の結果として県民らに報告されるべきものが発生した場合、それを提示・提供するしかるべき媒体が必要となる。これが、本誌『愛知県公文書館研究紀要』発刊の意味である。

当然ながら、継承といっても名称は異なる。事業体が異なるからである。しかし、刊行の精神は受け継がれる。本誌の編集委員はみな県史編さん事業に専門委員や執筆委員としてかかわった者たちであり、『県史研究』の編集にも直接かかわった者が大半である。ともかくも、事業の熱が冷めないうちに後継誌が編めることは何よりであった。なお、編集にあたっては基本的に『県史研究』が目指した内容と水準、即ち県の歴史研究に資するとされるもの（必ずしも県の現領域に限定するものではなく、前近代での関連領域なども含む）に則っていることを、あらかじめ断っておきたい。

本誌は『県史研究』の後継であると同時に、別の意味合いも有している。それは、地域史・地域研究に携わる人を育てるということである。『県史研究』にもそうした意図はあったのかも知れないが、それは前面には出ていなかった。しかし、本誌は少なくとも、「文書館」が「公文書館」しかない本県にとって、本館に「資史料館」の役目が付与されている現状を鑑みる時、生涯学習・教育上の大きな任務が課されていると思わざるを得ない。その機関が原稿を募集し査読して研究誌を

発刊するのであるから、これは機関に属している者が研究発表するという中身の紀要にとどまるものでなく、研究する者を育てるという意味合いが出てくるのではないか。学会・研究会というものでなくとも、県にかかわるフィールドで仕事をする者たちの切磋琢磨する場となれば幸いである。ゆえに編集する側の責任も極めて大きいのであり、心して臨みたい。

さて、愛知県は日本列島のほぼ中央に位置し、豊かな自然環境のもと人的資源にも恵まれ、バランスの良い地域的发展を遂げてきた。古くからモノづくり文化が根付き、産業化が進み、流通を支える陸運・水運が縦横に展開した。それらを背景に、近現代の日本社会と基底的に接続する近世（統一）社会は、この地域に由来した政治権力（信長・秀吉・家康）と密接につながっている。私はいわゆる三英傑史観に与するものではない。しかし、御三家筆頭尾張藩が統治した尾張部と家康の本貫地であった三河部で構成された愛知県において、そこに暮らす住民には一種の矜持を伴った歴史意識が醸成されていたと考えている。決して単なる御国自慢として片づけられるものではない、いかなれば質のよいナショナルリズムのようなものが育まれる土壌があったものとみている。そして今、私たちは、そうした歴史Ⅱ過去につながる文化および文化財を有用なものとして、まさに「活用」していくことが求められている。本誌により、科学的な実証研究（新たな発見を伴う）に裏付けられた県民の歴史認識の涵養が進み、総じて本事業が県民全体の生活・福祉の向上につながることを切に望む。

なお、さまざまな面で東西の地理的・文化的な区切り目にある本県地域は、列島社会を通覧する時、極めて優位な位置にあるということが出来る。東西の交流する様に感じて歴史的・民俗文化的な探究をなす上で、私たちは材料的にも極めて良い条件に恵まれている。さらに、地域の経済・文化の担い手となる都市名古屋は東西のはざまにあつて独自の発展を遂げた。十八世紀の一時期、尾張藩は幕府の政策意図に反した積極経済策を取り、緊縮と風俗統制で火が消えたようになっていた三都とは全く違う繁栄を見せた。特に文化面においては、三都では叶わなかった各種興業や出版事業が名古屋で行われるなど、多くの文化人、事業家をひきつけた。こうした歴史的経験は現在も継承されているのではないかと思う。

そして、三河人は同じ愛知県という括りにありながらも、かつて分県運動を行ったように、尾張（特に名古屋）への対抗意識を常に懐に仕舞い込んでいる。同じ領域にあつても同じ色にならないよう意識した住民らの地域的活動Ⅱ努力があり、

それらが県全体の地域的发展を支えることにもなっていると考える。いわば、本誌は愛知県という枠組みを持ちながら、かつての二つの国の地域的发展をも検討するという意味で役割を与えられたらというべきか。

以上、本誌成立のあらましを述べたが、同時に五名の編集委員を代表し編集子としての覚悟の一端も表明させていただいた（もちろん全員が同じ考えではない）。雑誌の水準は編集委員のそれによるのは自明であり、投稿の呼びかけでは十分に触れられなかったことについて少しく頁を割いた。なお、ここでは余りに県という枠組みを押し出した感がある。しかし、現在の県という領域での歴史事象を理解するためには、日本社会や人類社会に対する普遍的な眼差しが必要であることは論をまたない。材料はもとより課題や論点を県域にのみ限定して、事象の展開・理解の普遍性に無関心であることは歴史研究として許容できない。歴史の理論を地域に当て嵌めていく式の地域研究は論外だが、個別的地域から見えてくる世界が大切なのであって、そこで自閉的に完結させてしまうような地域研究とならないよう、本紀要を育んでいきたいと考える。どうか関係各位のご支援・ご鞭撻を請う次第である。